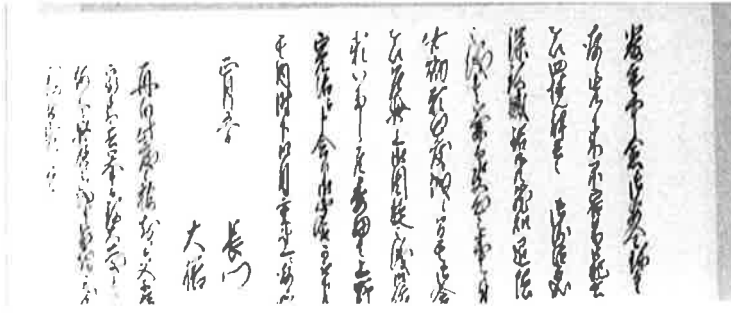


吉川史料館たより

第60号
2016年
(平成28年)
9月17日
土曜日

このたびは、毛利父子御内書を紹介します。



毛利父子御内書写(吉川経幹宛て) 慶応元年正月五日

(書き下し文)
敵寒中愈御安全珍重候 先日來不容易御配意を以四境解兵之御沙汰相成深致

感銘候

然處退隱之儀は兼而決心之事ニ付此御願出度儀候間

其御含を以乍此上御周旋之儀御依頼いたし候委細は上野寛治江

申合候御聞取可被下候 其内時下御自重第一ニ存候也

(慶応元年)

正月五日

長門

大膳

再白此度之報知ニ而 父子始家来共舉而致大慶候 何分此餘之儀も万端可然致御頼候 以上

監物様

机下

(現代語訳)

敵寒の折、いよいよ御安全珍重です。

先日、容易ならざる事がおきまして、配意を以て四境解兵の沙汰となり、深く感銘しています。

然る處、退隱のことは兼ねてより決心していたところです。この件を願出したいのです。それをふまえて、此度の幕府側との周旋を依頼したく、詳しくことは上野寛治よりお聞きください。

発行所 吉川史料館

山口県岩国市横山二丁目七一三

郵便番号 七四一—〇〇八一

電話番号 (〇八二七)—四一—一〇一〇

只今は慎重姿勢が第一と存じます。

正月五日

長門

大膳

追伸、此度の報知につき、父子をはじめ家臣一同挙げて大慶いたしております。何分に他のことも万端頼りにいたしております。 以上

(解説)

書状の送り主は、大膳(毛利敬親)と長門(毛利定広)です。年号は記されていませんが、文中で四境解兵と周旋について記されており、第一次長州征討の開戦を回避した後、慶応元年(一八六五)のことです。

幕末期、長州藩は、藩是を公武合体開国から攘夷へ変更し、文久三年(一八六三)五月十日の攘夷決行日には下関にて外国船に砲撃をしました。

それに対して、長州藩は、孝明天皇より褒勅を賜りました。その後、長州藩はさらに攘夷の気運を高めるため、天皇の大和行幸(神武天皇陵と春日大社へ攘夷を祈願)の決定に関わりました。しかし、急進的な攘夷派の一掃が行われました。いわゆる八月十八日の政変です。三条実美をはじめとする攘夷派の公家らは参朝停止となり、長州

藩は御所の警衛を罷免されました。

そして、長州藩と七人の公家は長州へ下りました。その後、毛利敬親は京都へ家臣を派遣し、申し開きを試みるも、入京すら出来ませんでした。

元治元年(一八六四)六月、池田屋で長州藩の人々が殺害され、その報をうけると五つの部隊を編制し、次々と上京しました。経幹は、上京には最後まで反対していましたが、敬親に上京依頼をされ忸怩たる思いで京都へ出発しました。途中、御所の蛤御門にて長州藩と会津・薩摩両藩が衝突し、砲撃に至りました。その火で京都中は大火に見舞われ、すぐに長州征討令がくだされました。長州藩側としては、幕府との戦争は避けたいところであり、経幹は広島や福岡藩の協力をえて、恭順姿勢をしめし、戦争回避に動きました。

一方、征討総督の徳川慶勝は、戦いをさげようと考えており、参謀の西郷隆盛を岩国へ派遣し、経幹に恭順姿勢を示すように促しました。戦争回避で経幹が行動したことは毛利父子には有難いことであったことは、この手紙に示されています。ただ、世間ではあまり知られていないのが残念なところです。

(原田史子)

秋広太刀 一口

刀剣はその美しさに魅了されるが、細部の鑑賞はなかなか難しく、私は苦手にしている。

今回展示されている「秋広太刀」について、所蔵台帳を見ながら、説明を試みてみる。

この刀は、南北朝時代、相模の国、秋広の作である。茎(なかご)銘に「相州住 秋広」とある。寸法等は次のようである。

- 「身長 68、2センチ
- 反 2、6センチ
- 鋒長 3、3センチ
- 茎(なかご)長 15、□センチ
- 幅 元3、0センチ
先2、2センチ
- 鐔(しのぎ)幅 元0、9センチ
先0、7センチ
- 鐔厚 元0、7センチ
先0、5センチ
- 茎銘「相州住 秋広」佩表
少磨上 区わずかに送る
- 目釘穴 一 他に先端に半残
- 釦目 浅き勝手下り
- 棟 肉心 刀小肉
- 身 鐔造 三棟 両区

彫 表三鉾剣の上に梵字一
裏護魔箸の上に梵字一

地 小杢目に板目交わる 沸付き

刃 盛なる皆焼(ひたつら) 棟焼、湯走、飛焼(とびやき) 等あり
匂強く小沸つき足葉入り砂流金筋かかる

帽子一枚 沸崩九 大きく突上げ尖り返る

この太刀は「古刀」に属する。『日本刀』(別冊宝島2288)によると、「10世紀前半の平将門の乱、藤原純友の乱以降、反りのある湾刀が現れ始めた。以降、室町末期までの力は古刀として分類される。

鎌倉初期までの刀は細見のものが多く、腰反りが著しいのが特徴的だ。また、元幅に比べて先き幅が狭くなっているものが多い。刃長は2尺5寸(75、8 cm)程度である。

鎌倉中期には、重ねが厚く、身幅も平肉も豊かな刀が増え、いかにも豪壮雄大な太刀の体となった。鎌倉末期、南北朝時代とこの傾向は続き、南北朝時代には3尺(90、9 cm)の太刀も現れる。切っ先も大きい。」とある。

また、台帳には、刀剣の鑑定家三矢宮松氏評として、「秋広の時代下りたるものならんが良き刀なり。」

秋広の有銘は稀なり。(北白川宮に一口あり。)貴重すべきもの也。冬広にあらず) 区を六七分上げ茎先を切りしは遺憾なるも他は完好にして優なり。」とある。

さらに、台帳には「由緒」として「右御真剣の儀は御重代の御差料と、古代より相唱え御旅行の節は必ず御持たせなされ、竜の丸具足と同様なる由古帳に記しありという。それ故、有恪公(経幹) 御代に御太刀御修覆相成りしも何れえ御持せなされても御都合よろしきようにとの御含みよりという。」とあり、吉川家では鎌倉時代から歴代当主が重宝したことが知れる。



秋広太刀 1口

最後に、『詳説 刀の鑑賞(基本と実践)』中原信夫(平成18年2月20日 第2刷)の「皆焼(ひたつら)」についての説明を紹介しておきます。



『皆焼とは本刃と銚子と棟焼と飛焼(とびやき)が一揃りになったもので相州秋広・広光が始めた」とされている。室町時代末期には全国の刀工にこれがみられるが、新刀・新々刀には写物以外には殆ど見られない。飛焼は土落や焼崩とは違う。

皆焼刀をして相州傳と捉えるのは明白であって、時代の上る相州本國の皆焼刀とは「沸出来で上に行く程乱が大きくなり焼幅も広くなり沸も強くなり沢山つく。そして飛焼も上に行く程多くなる」という本阿弥家の定義がある。従ってこの特徴に外れた皆焼は相州以外の国か又は時代が下るとみるべきである。」とある。



(藤重豊)

史料館を訪ねて

吉川氏の関ヶ原展を見て

三浦 誠 一

我が家の家系は代々受け継いできた系図によれば、関ヶ原合戦の折、毛利家の存続を按じた廣家公は、合戦前夜仕えていた三浦家四代の三浦傳右衛門を呼び出し、黒田の陣に権現様に戦後主家の安泰を願ひ、毛利・吉川の軍は合戦に参加せずとの内命を伝える為軍使として、傳右衛門に吉川家伝来の鯨形兜を冠して、和議の方法を協議させた。家康の本陣に伴われた傳右衛門は、赤坂の陣にて家康に閱し、本多忠勝と井伊直正の起請文を受け取り、関ヶ原南宮山の廣家の陣に持ち帰ったとあり、此のことは我が家の系図に書き留めてあり、父からも言い伝えられていました。

今回の関ヶ原合戦の折の展示品で実物の起請文を拝見し、言い伝えられていた「鯨形の兜」、傳右衛門が持ち帰った書状の現物を目の当たりにして、目の前にある数々の実物に感激いたしました。

岩国に帰ると墓参りを第一に、親戚に会ったり、自分の好きなお城関係の調べやらをして、感激して東京に帰りました。

また頂いた『十二代藩主吉川経幹』および『英智の三藩主』の二冊を新幹

線の中で読みながら、昔読んだ幕末防長勤王史談を想い出し、あれから高杉晋作が好きになったし、また読み返したいと考えながら、帰路につきました。私の念願でした岩国城を、書類の説明より実態模型を見て頂く方が判ってもらえるのではと思っていましたので、それを吉川史料館のロビーに置いていた。だき目的が叶いました。あとはお城山のかなり残っている城跡の保存を、天守と錦帯橋と共に後世にお願いしたいところです。

今のお城を見に入る広い道は、昭和22年の大釣井の写真をみると、岩国城本丸下からの見た角度が今の自動車道より高い位置の郭の跡で、当時井戸にゆくのに途中休み場所のあったかなり急な石段の降り口から撮影したと思います。昭和9年の初めての撮影は、井戸の囲いはありませんでした。今の道は戦時中に着手されていたのではないかと考えています。

(東京都在住)

ふるさと岩国

河野 芳 子

私は生まれも育ちも岩国です。河野家は私で二十二代目です。ずっとこの地に住んでいたかは定かではありませんが、実家は旧町名曲尺町(さしがね)にあり、江戸時代に建てられた家には現在も両親が住んでいます。家は手は

入れながら百六十五年住み続け、この夏には大掛かりな屋根の葺き替えをしました。骨格はほとんど江戸時代当初のもので、角には蔵があり現在も季節の入れ替え品の保管場所として使われていますが、古い長持や茶箱なども入っています。

子どもの頃は古くて住みづらく、渡り廊下先の暗いトイレ(現在は改修は、夜は怖くて行きたくなく、お風呂は五右衛門風呂(現在は改修)で入りにくく、新しい家に住みたいと思っていました。今もこの家に住み続けている父は家のちよつとしたことならすべて自分で直し、母は季節ごとの飾りつけを楽しみ、江戸時代からの家を大切に慈しみながら維持しています。

私は大学の四年間と結婚して三十二年岩国を離れて生活しています。帰省の際子供が小さい頃は私が小さい頃遊んだように両親は孫たちと一緒にお城山に登ったり、川に泳ぎに行ったり、吉香公園を散歩したりしたものです。

両親が年をとり私の手助けが必要となった現在、時には父と散歩し、父の通った旧岩中校舎跡の公園で昔話をしてくれたりします。また母と吉香公園や紅葉谷公園をドライブしたりします。近くてよく行ったところなのに、岩国は季節の表情が豊かで美しいために何度行っても飽きない素晴らしさがあります。母が病気になる看病して疲れて心も身体もくたくたになった時に私を包んでくれたのも、お城山の風景や美しくたたずむ錦帯橋でした。橋の中ほ

どの段に座り込み川風に吹かれながらせせらぎの音を聞くことは、どんなにか私を慰めてくれたことでしょうか。現実の中からほんの少し歩いたところにこんな宝物のようなところがある私は本当に幸せだとつくづく思いました。

現在は千葉県に住んでいます。このところちよくちよく帰り、なかなか味わえなかった岩国の季節のすばらしさを堪能しています。いつかはこのふるさと岩国に住み、古い家とともに生活することになると思いますが、今のところ愛すべきふるさととしてとっておこうと思います。

(千葉県在住)

お知らせ

吉川俳句大会 募集開始

今年も吉川俳句大会の募集の時期が来ました。

- 一 児童・生徒の部作品募集 9月12日～10月11日
- 一 一般の部作品募集 9月20日～10月20日
- 一 投句先 741-0081 岩国市横山2丁目7-3 吉川史料館

吉川重吉、アメリカ大統領に謁見す

江戸時代最後の藩主、吉川経幹には、経健と重吉の二人の男子がいた。重吉は、安政6年(1859)生まれである。大正4年(1915)に死去、57歳であった。

明治3年4月、東京に遊学して、開成校(後の東京大学)に入学した。翌年、特命全権大使岩倉具視等欧米視察の一行にしたがってアメリカに留学した。ボストンに居住して、「ライス・グラマー」学校に入学した。(14歳)。続いて、「ジョンシー・ホール」学校に入学、(17歳)。

その後、明治12年9月、ハーバード大学に入学、明治16年6月に卒業している。25歳であった。

このハーバード大学に留学中は、中原儀三郎という人物が同行していた。勿論元岩国藩士の子弟であった。当は大蔵省に出仕していた。嘉永5年(1852)生まれで、重吉の入学と同時にハーバード大学に入学している。おそらく重吉の学友として随行するように要請されていたと思われる。

この中原儀三郎から、吉川家東京本邸の家令下連城宛の書状が、岩国徴古館に所蔵されている。51通ある。用紙に筆で書かれたもので、風化が進んで反故のようになったのを学芸員が丁寧に裏打ちしているの、かろうじて読める。その点、我が国の和紙は年代による風化がほとんど起こらないから、優れていると言える。

書状の内容は、送金の受領の確認や使途について、またハーバード大学の組織、授業、学生寮の生活、あるいは重吉の健康状態が多く報告されている。そのほかに自分が見たり聞いたりするアメリカ社会の風景や風俗習慣が書かれている。南北戦争の余韻がまだ漂っているように、黒人、インディアン、あるいは早くも流入する多くの中国人移民の問題など、いまの私には興味ある記述に出会う。

アメリカの大学では休暇中は、避暑のために郊外でゆっくり生活したり、あるいは日頃出来ない旅行にも出かけている。

ここでは、明治12年(1879)12月20日、大学の寄宿舎を出発して、翌年1月初めまで、首府ワシントンの周辺に旅行を試みた記事の中から、一つのエピソードを紹介しよう。

「12月24日 雨。(前略)夜、8時前5分馬車にて公使館を出立、大統領の公館西入口に着す。是より車を出て控所に入る。此所にて各名札を出す。人來り僕等を謁見所に導く。依て各席に就く。相待つ事23分にして夫人『ヘイス』氏入来り、『ランマン』氏の紹介に依り僕輩に向て握手の礼を行わる。次に大統領入らる。其の礼夫人と同じ。

右の簡単な礼終りし後、大統領は公子と小生の間に、夫人ヘイスは津田・山川の間に座せられ会話を為せり。先づ大統領公子に向い曰く。(中略)退出の時に始めの如く大統領及び

夫人ヘイス氏握手の礼を為せり。夫人は僕輩に向かい、懇ろに各室を巡見すべき旨を述べられたり。依て各室を巡見したり。右の各室は皆て岩倉大使一行の国書を呈し、或は夫人ブランド、各省の卿輔等に面会したる場所なり。

8時半頃公使館に帰る。日本婦人は直に帰宅。公子と小生とは公使に居残り、吉田書記官と共に、曾て日本開拓使の御雇と為り、北海道に在留したる前勸業局長ケブロン氏の宅を訪う。同氏の宅は公使館の北12町を去るのみ。会話実には面白く、大に北海道開拓上の事に付き、学ぶ所あり。10時半頃まで、此の家に居り、依て帰宅す。(以下略)

ここに出てくる日本婦人の津田、山川の両名は、岩倉大使一行と共にアメリカに留学した津田梅子と山川捨松を指すと思われる。吉川重吉も同じ船で太平洋を渡った仲間であった。この行間には表われないが、3人には積もる話もあったことが推察できる。この2人もなお留学してとどまっていたと見える。また、このときの大統領はラザフォード・ヘーズ(共和党)であった。

その後、26日には、合衆国大政事堂にかけ、上下議事および大審院を見て。29日にはワシントンの墓地を訪問した。

こうして明治16年(1883)6月、吉川重吉と中原儀三郎は揃って、ハーバード大学を卒業した。いまハーバード大学の同窓会名簿には日本人と

して初めての卒業生として、2人の名前が載っているという。

まもなく吉川重吉は井上馨の勧めもあって、外務省に奉職し、明治20年(1887)4月には公使館書記官に任じられ、8月にはドイツのベルリン公使館在勤を命じられた。ときに29歳であった。(藤重 豊)

編集後記

今年一月から薩長土肥鹿兒島、山口、高知、佐賀でスタンプラリーを開催しています。これは、平成三十年まで三年間行うものです。平成三十年は明治維新百五十周年の節目です。先日、平成三十年のNHKの大河ドラマが「西郷隆盛」に内定したとニュースで見ました。偶然にも今回の展示品に西郷隆盛の書状(元治元年ですから、名前は大島吉之助)を展示しています。

西郷隆盛は、第一次長州征討で幕府側の参謀として大活躍し、その人となりを吉川経幹は信頼します。是非一度ご覧いただきますよう、ご案内申し上げます。(原)

吉川史料館
〒七四一〇〇八一
山口県岩国市横山二丁目七・三
TEL 〇八二七・四一・一〇一〇
FAX 〇八二七・四一・三一〇〇